

第30回 友情のレポーター（2015）フィリピン取材レポート

菅 拓哉（埼玉県／当時 12歳）

- 期間 2015年3月25日～4月3日
- 訪問地 マニラ、レイテ島（タクロバン）、サマル島（マラブット）
- 行程
- 3月25日 マニラ到着
- 3月26日 レイテ島 タクロバンへ移動
空港近くのシティホール、船が乗り上げた地区で取材
- 3月27日 サマル島 マラブットのチルドレンセンターでワークショップ(WS)
自然災害の体験や日本の防災について共有
- 3月28日 ケレンさんの家で取材、WS2日目は災害直後に必要な物の意見交換
マラブットの大人たちにも取材
- 3月29日 ウルベリオ君の家で取材、WS3日目は、一国のリーダーとして災害
直前直後・復興時の役割について意見を分かち合う
- 3月30日 移動中に津波警報の発令と待機、WS4日目は自分たちが考えたこと
に対し、お互いにアドバイスをし合い、発表に向けて準備
- 3月31日 WS最終日、マラブット市長、校長先生、保護者の方の前で「自然災
害」をテーマに発表、みんなでバーベキュー
- 4月1日 マニラへ移動
- 4月2日 パヤタスのチルドレンセンターを訪問、歓迎会、ごみ山周辺の取材、
若者の家を訪問、歓迎会、取材
- 4月3日 帰国

3月25日

マニラの空港からホテルまで車で行く途中に、たくさん子どもたちや大人がさまよっていました。それがフィリピンに着いて一番初めのカルチャーショックでした。

3月26日

マニラからタクロバンへ。空港は台風の影響かまだ水びたしでした。台風が来る前はタクロバンのシティホールだった場所へ行きました。建物は正面以外あまり整備されていませんでした。

ここは台風のとくに避難所として使われましたが、海に近いためここに避難してきた人みんなが亡くなってしまったそうです。

そこの裏で遊んでいる男の子たち 10 人と出会いました。

この付近に住んでいる子たちで、台風のとときには自分の家の屋根に逃げて命は無事だったと言っていました。でも、仕事に行った親が高潮で流されてしまい、親がいないという子もいました。

次に、船が陸に上がってしまった場所へ行きました。その付近には小さなスラム街が広がっています。

僕たちは一人の男の子をお願いをして、その子の家を訪問させてもらいました。

名前はジャンジャン君。お父さんはマーケットで働いています。

この家は家族が 11 人いて、子どもまでが働かなければ生活が成り立たないようなきびしい家庭でした。ジャンジャン君も昔は学校に通っていました。けれど、お金が無くなってしまい、ドーナツを売って働いていたそうです。

ハイエン台風では家が吹き飛んでしまい、新しく建てた家も去年の 12 月の台風で屋根が飛んで、今は支援団体から屋根をもらって生活しています。

床は板だけなので隙間だらけで、目の前にある海の潮が高くなるとすぐ浸水してしまい、屋根からは雨漏りもします。

家がとても小さくて暗いため、洗濯などは外でやっていました。

小 3 から学校に行っていないと言っていました。学校は卒業したいとのこと。

このような場所に取材に行ってみると、本当に悲しくなりました。

家も食べ物も不安定で、学校に行きたくても行かない。

僕より上の年齢の子でも、背丈は肩までしかありませんでした。

ここではしっかり栄養が取れないのだなと思いました。

それに、衛生状態もとても悪くて蚊もいっぱいいるし、感染症もはやりそうでした。

周り中にゴミが散乱し、いたる所にゴミの山ができていたのでとても臭かったです。

生まれたところが違うだけでこんなに格差があるなんて。

だから本当になんとかしたいと強く思いました。

3月27日

マラブットにある KnK のチルドレンセンターに行きました。6 人の男の子と女の子がいて、自己紹介の後に日本から持ってきた伝統的な日本の遊びを披露しました。

コマ・剣玉・ヨーヨー・折り紙・剣・シャボン玉・紙風船・水風船・扇子などで、とても喜んで遊んでくれました。僕はハッピーを着て、旭ちゃんは浴衣を着ました。

その後、旭ちゃんが東日本大震災について紙芝居で語りました。

僕は、フィリピンと日本での自然災害の共通点や、防災用品の紹介、学校の防災訓練について話をしました。

次に、みんなにハイエン台風のときの経験を話してもらいました。教会に避難した子やキッチンに避難した子、木の陰に身を潜めた子などいました。

みんな共通して言っていたのは、周りの風景を見てとても怖くて泣いてしまったことです。話している途中に泣き出してしまった子もいました。

聞いている方も悲しくなり、苦しくなってしまうました。でもフィリピンの子達は、めげずにしっかり話をしてくれて、その経験を僕たちに伝えてくれて、とても勇気があると思いました。

3月28日

午前中は、昨日友だちになったケレンさんの家で取材をしました。お父さんが神父さんなので家の隣に教会を作っていました。ハイエン台風と昨年の台風の土砂災害の影響で 2 回家が壊れてしまったため、今は崖の下に家を建てて住んでいます。7 人家族で今は不自由なく暮らしていると言っていました。

ケレンさんの将来の夢は学校の先生です。なぜなら、読み書きのできない子どもたちを教えてあげたいからだそうです。

家は畳 4 畳分くらい、土がむき出しで虫も入ってくる。あんなに小さくて暗い家に 7 人の家族が暮らしているなんて、想像もつきませんでした。

何度も何度も被害を受けているのに、くじけずに自分の夢に向かって頑張っている。彼女は強いんだなと思いました。

午後は昨日のワークショップの続きです。災害直後に必要な物は何か、意見を分かち合いました。子どもたちの中では、食べ物や水や服、教育などが出ました。

次に近くの大人の人にもインタビューに行きました。面白いことに、子どもが思いつかないような答えを出してくれました。例えば、お金やおもちゃ、仕事などです。

これらは僕が思うに、大人にとってはお金があればいろいろなものが買えるし、子どもが一番大事なのでおもちゃもあるといい。お金をかせぐには仕事も大切というように、大人にとっては最優先な物事なのではないかと思いました。

年齢や立場によって、いろいろな角度からの考えかたがたくさん分かり、とても楽しかったです。

3月29日

午前中はウルベリオ君の家に行きました。海が近いので海水面が上がり浸水すると台風のをきを思い出して泣いてしまうそうです。お父さんは大工なので台風の後、2週間後には新しい家ができたそうです。この家は7人兄弟で両親あわせて9人家族です。

将来の夢は警察官。かっこよくていつも憧れていたから、と言ってくれました。

午後はワークショップです。昨日考えた次の災害に備えて必要なものの中から、重要な8個を決めました。薬・食べ物・トイレ・防災用品・教育（学校）、教育（学校以外）・警察・家。それぞれが担当の大臣となり、災害直前・直後・復興時に何ができるかを絵に描きました。

3月30日

レイテ島からサマル島に出発して30分位した頃、KnKの東京事務所から「パプアニューギニアで地震がありました。サマル島にも津波警報が出ました。様子を見て下さい」と連絡がありました。サマル島に渡る橋を渡ったすぐの地点で、津波警報が消えるのを待ち、そのままマラブットまで行きました。

到着してからは、昨日出し合ったアイデアに互いがつっこみを入れ疑問を投げかけました。そうすることで、具体的で興味深いアイデアを生み出す作業につながるからです。8人全員が発表をし、お互いにたくさんの意見を出し合いながら、形にしていきました。

僕は医療大臣なので、日常生活の中では医者がいなくても応急手当ができるようにする。そのため、市役所などで「応急手当の講座を開く」という提案をしました。

するとフィリピンの子たちから「病院を強化するために木材や鋼鉄を貼りつけて、患者さんを守ろう」などの考えを聞きました。

このことから、被災したことは辛い経験だったけれどだからこそ「こうしたほうがいい」という視点がたくさんあって、とても勉強になりました。

みんなイキイキとして、目が輝いていました。

3月31日

ワークショップの最終日。午後の発表に向けて準備を開始しました。午後の発表ではマラブットの市長さんやみんなが通う学校の校長先生や先生方、保護者のみなさんが見に来てくれました。その中で一人ずつ前に出て、自分のテーマに沿って考えて絵にしたものを発表しました。

みんなとても真剣に聞いてくれて、発表の後感想も言ってくれました。その例は「絵でも書いてあってとても分かりやすかった」「この考えを活かして次の災害の時に役立ててほしい」などすばらしい感想を言ってくれました。

その後、見に来てくれた方と一緒にみんなでバーベキューをしました。最後に絆を深めるためシーソーと一緒に遊びました。連絡先を交換したり、タガログ語の会話帳でタガログ語を教えてくれたり、心が通じ合っているのがすごく嬉しかったです。

実はみんなの発表を聞いているときも、もうすぐお別れなんだという気持ちがずっとよぎっていました。終わった後は、もう別れてしまうことがすごく残念で、今までずっと一緒に考えてきた仲間だから、とても悲しくなりました。

「みんなとずっと繋がっていたい。」輪になってハグをしたとき、改めてそう思いました。

4月1日

タクロバンからマニラへ戻りました。

4月2日

午前中は、パヤタスにあるKnKのチルドレンセンターに行きました。パヤタスとは、ゴミ山があり周りにスラム街が広がっている、マニラに近い地域です。

チルドレンセンターでは、僕たちのために歓迎会を開いてくれて、ダンスや歌などをたくさん披露してくれました。そこからスタッフのジョナサンの実家に行き、取材をしました。7人兄弟で、お母さんだけのお金では暮らしていけなかったのが、6歳からごみ山に働きに行っていたそうです。朝5時から12時まで仕事をし、1時から7時まで勉強をしていたと言っていました。

次にリノ君（10歳）の家に行き、取材をしました。リノ君はときどき、チルドレンセンターでやっているKnKのプロジェクトに参加していました。

家族は4人兄弟で、お母さんがいます。お父さんは子どもができてからすぐ違う女の人と結婚してしまい、家にはいませんでした。その子もごみ山で週に4日、1日5時間くらい働いていました。兄弟の3人は女の子でごみ山では働けないので、リノ君

だけが働いています。お父さんがいないため、自分が家庭の生計を立てていかないと
ならない状況でした。

次にマニラにある若者の家に行きました。そこでも歓迎会を開いてくれて、ダンスや
歌も披露してくれました。最後に一人一人から僕たちにメッセージをもらいました。
みんな親切で、一緒にバスケットをしたりとても楽しかったです。

僕たちは、刑務所から若者の家に来た男の子に取材をしました。その子は、8歳でお
父さんが亡くなり、路上生活を始めました。ストリートチルドレンとなってからは物
を買うお金を毎回友だちと盗んでいたそうです。それが見つかって、警察に捕まって刑
務所に入ってしまった。でも、刑務所の中の子たちとうまくいかず、けんかをし
て殴ったり殴られたりしているときにKnKと出会って、若者の家に来たそうです。
自分はけんかや暴力ごとにたくさん巻き込まれている、その経験を活かして将来は兵
士という守る側の人になりたいと言っていました。

子どもでも刑務所に入ることに驚いたのですが、自分の辛い経験を活かして他の人の
ためになることを考えている彼を心から応援しています。

感想

この10日間で、感じたことが3つあります。

一つ目は、貧しさや豊かさというのはただの価値観であり、人に決められるものでは
ないということです。

例え周りからひどい状況に見えたとしても、家族で生活できることに感謝している。
何不自由なく暮らしている僕たちが気づかないものを、彼らは大切にしている。
希望を持ってがんばっている友だちの豊かな心に触れて、何度もあたたかい気持ちに
なりました。

今は困難な状況でも、こうなりたいと夢を持って生活している姿を見て、僕も力を合
わせて一緒にがんばっていこうと思いました。

二つ目は、病気になりやすい環境についてです。

特にパヤタスの衛生状態は、言葉に言い表せないほどひどいものでした。生臭い臭い
がして、その空気を吸っているだけで気持ちが悪くなります。川はゴミだらけで泥上
になっていて、その上を渡るだけで吐きそうになりました。

何でこんな所に住まなければいけない子どもがいるのでしょうか。

病気でも診てもらえない人もたくさんいるし、もし、あそこに医者が行ってもあの状
態では医者自身が病気になってしまうかもしれません。

「健康で暮らすことができる、良い環境をつくるには何が必要なのか」

僕は、公衆衛生の分野を改めて学びたいと思いました。

三つ目は、フィリピンと日本に対する僕の思いです。

例えば、ゴミ山は火をつけると爆発してしまうようなゴミもあり、非常に危険な所です。数年前にはゴミ山が崩れて、たくさんの死者や負傷者が出ました。

それなのに、僕よりも小さい子が暑い中で何時間も働いています。

なぜそんな危ないことをしなければならぬのか。でも、働ける人は収入を得られるものを探せるので、まだ恵まれているという矛盾があります。

今回の取材を通して「何とかしたい」ことがたくさん見えてきました。

その一方で、日本の教育や医療、治安を守ってくれるたくさんの人や社会のシステムが機能しているおかげで、僕たちは安心して暮らすことができているということにも気づきました。

その日本も、少子高齢化の問題や、グローバル化の流れなど多くの課題があります。大人でも解決できないことばかりなので悩んでいます。

こうしたすぐに答えの出ない問題に対して、一生懸命に考えながら他人と意見を交換していく哲学対話がヒントになると思います。

ノーベル平和賞を受賞したダライ・ラマ 14 世の記事にも「複雑な問題が絡み合うときこそ、対話の道を探るべきだ」と書いてありました。

見てきた現実を伝えながら、語り合える場を増やしていきたい。

そして、世界をより良く変える仲間をもっとたくさん作りたい。

「今の僕にできることは何か。」

これからも、常に問いを持ち続けながら行動していきます。

第 30 回 友情のレポーター（2015） 菅 拓哉

第30回 友情のレポーター（2015）フィリピン取材レポート

佐藤 旭（岩手県／当時 12 歳）

フィリピン

公用語	タガログ語
首都	マニラ市
面積	299,404 平方km(70位)
人口	92,337,852人(12位)
識字率	95.4%

7000もの島々からできています。
赤道近くにあります。（日本と比べて）

驚いたこと

バロットを食べる。ふかしかけのアヒルのゆで玉子。

いろんな民族の人がいること。（タガログ族・ビサヤ族・セブアノ族・ヒリガイノン族…など。まだまだたくさん。）

在日フィリピン人が多いこと。約22万人。

日本とフィリピンの同じところ・ちがうところ

同じところ

- ・米が主食
- ・13種類の丸い食べ物をかざる。
- ・日本は七五三ですが、フィリピンでは、1，7，18，21さいのときにいわれます。
- ・台風の通り道であること。

=====

意外に同じところが多くて、びっくり!!!
ちがうところも気になります。

タガログ語

こんにちは→マガンアールウ
ありがとう→サラーマット
私の名前は～です。→アンパガーランコ
～さいです。→タオンナアコ
12→ラビンダラワ
60→アーニムナブ
67→アーニムナプットピト

私は友情のレポーターとしてフィリピンのサマール島やレイテ島に行ってきました。初めて行く海外だったこともあってドキドキしていたけどがんばりました。

3月25日[1日目]

(羽田空港からフィリピンのマニラ)

飛行機にのって約四時間。フィリピンに到着しました。

私が住む岩手では、まだ雪がのこっていたのに フィリピンはすごく暑くて、すごく遠いところにきたんだと思いました。

ムワツとしていてむしあつい。空気は甘くてベトベトしているかんじ。その日はもう夜だったので、フィリピンの首都マニラのホテルにとまりました。次の日からの生活にすごくドキドキしていたけれど、しっかりねて体を休めました。

3月26日[2日目]

(マニラからタクロバン)

この日はタクロバンというところに飛行機で移動しました。タクロバンの空港も台風で大きな被害をうけたそうです。でも、簡単なつくりというだけで、台風の被害をうけたところにはみえませんでした。その再建の早さにびっくりしました。

その後タクロバンのセンターに行きました。そこで遊んでいた子どもたち(10人くらいの男の子)とはなしをしました。なかには私と同じ年の12さいの男の子もいました。

私は背が低いほうなのに、私よりもその男の子たちは背が低かったです。私はその

現実におどろき悲しい気持ちになりました。
「栄養でこんなに背がかわるんだ。」
同じ12歳には思えませんでした。

陸に乗り上げてしまった船の
近くで木をひろっていた子ども
たちと会いました。
木を拾っていたので、何に使う
のか聞いてみると、遊ぶため
の家をつくるのに使うと言っ
ていました。
日本でいう秘密基地みたいなも
のだと思いました。その子ども
たちの家に行くのに船の下
を通りました。



船の下をくぐると、テレビで
見たことがあるような木材でつくってある、風邪がふいたらすぐふきとばされそうな
家がならんでいました。そういう家に住んでいる男の子の家に訪問をさせてもらい
ました。家にはいる前からびっくりしていたのですが、家の中にはいってもっとびっ
くりしました。

電気がない、せまい、雨もりしそうなど、生活をするのに大変だろうと思う所が
いくつもありました。その家に住むジャンジャン君は13さいでした。そんなに私と
年はかわりません。ジャンジャン君が一つ年上なだけです。自分がここで生まれてい
たら・・・と考えてみました。なんだかすごく悲しい気持ちになってしまいました。

11人家族で住んでいるとは思えない広さでした。「学校に通いたいけど通えない。」
その言葉をきいて自分が当たり前前に学校に通っていることに感謝しなければならな
いと思いました。

夜、ホテルに帰ってから目を閉じると、ジャンジャン君が頭の中にでてきました。「私」
はベッドでねてるけど、ジャンジャン君は、あの家でねてるんだろうな。」

ジャンジャン君のような人たちの暮らしを改善しないといけないと思いました。

3月27日[3日目]

タクロバンから車で約2時間。マラブットにつきました。

友達になれるかな？車の中で心配になってきました。いざみんなにあってみると、みんな元気で明るい日本にいる子どもたちと何ら変わりませんでした。日本のおもちゃでみんなで遊んだあとは、自分の震災の体験を話しました。マラブットの子もたちにもヨランダなどの台風の被災について話してもらいました。話しながら泣いてしまった子もいて、よほどこわかったのが伝わってきました。



3月28日[4日目]

その泣いてしまったケレンの今の家に行ってきました。その今の家の建っている場所は、泣きながら語ってくれた、前の台風で被害を受けた元の家のおすぐ近く。ケレンのお父さんは神父さんなので、教会も建設と中でした。ケレンの家はせまくて、ありもいるし、私なら一日も生活できそうにありませんでした。

なんて言ったらいいのかわからないけれど、日本だったら日本中どこを探してもない、人が住んでいるとは思えない家でした。これなら台風がきたらすぐ風で吹き飛ばされるだろうと思いました。

ケレンの夢は学校の先生になることだそうです。がんばってその夢を叶えて欲しいと思います。



この日は、大人の方にもインタビューをして、災害直後に必要なものはなにかを考えました。子どもが出した意見と大人の意見。大人の意見のほうには、子どもの意見ではでてこなかった「仕事」や「お金」がでてきておもしろいと思いました。

3月29日[5日目]

この日は、ウルベリオの家を訪問しました。周りの家からくらべるとすごく立派でした。

それもそのはず、ウルベリオの家が立派だったのは、お父さんが大工さんだからでした。でも、台風のことを思い出して泣いてしまうとっていたのは、海がものすごく近いからでした。それに家を建てるのにかけた時間は、たったの2週間ぐらい。次に台風がきたときの事を考えると危険です。

ワークショップでは、大臣を決めて、それぞれの分野で災害の備え方を考えました。7日目、それを発表するので、楽しみです。

3月30日[6日目]

みんなとワークショップをするうち仲もよくなってきました。地域の人にインタビューをして、一人ひとりが大臣になって台風がくるまで2日間あったら何ができるのかを考え絵にまとめました。

3月31日[7日目]



いよいよ、みんなと会えるのもこの日が最後。このときは「早いなあ」と感じたけれど、今ふり返ってみると「長かったなあ」とも思います。一つ残念だったことは、エイドリアンがこの日来ることができなかったことでした。

そしてむかえた発表会。市長さんはきませんでした。校長先生や保護者の方々をよんで発表しました。それまで考えてきたことを一人一人一生懸命発表することができました。発表のあとは、バーベキュー。食べ終わると、みんなの電話番号をノートに書いてもらいました。みんなと会えるのもこれが最後かもしれません。でも、またどこかで会えるきがしました。だから「バイバイ」ではなく「またね」といってわかれしました。車でタクロバンにもどろうとしたとき、みんなが外で手をふってくれました。みんなの姿が見えなくなっても、なんだか明日もまた会えるような気がしました。

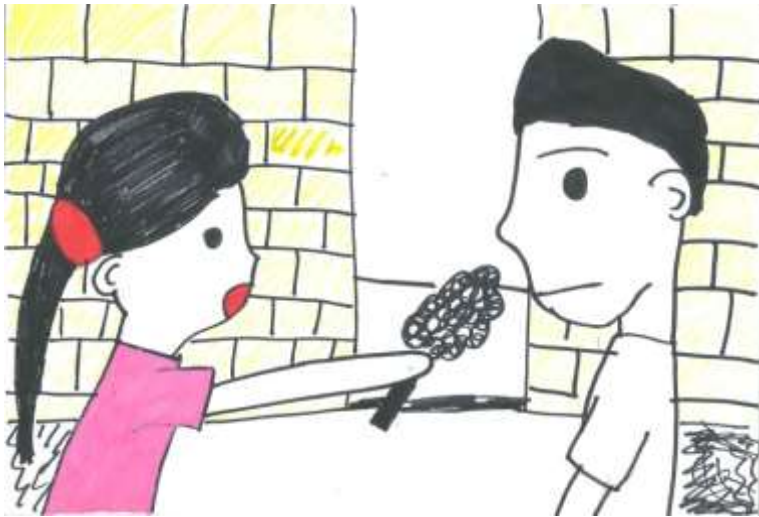
もう、しばらくは会えないと分かっているけど、友だちのままだから、別に悲しい気持ちにはなりません。一生みんなのことは忘れないと思いました。



4月2日[9日目]

(マニラ)

マニラにもどってフィリピンで活動する最終日。まずパドタスに行きました。チルドレンセンターで子どもたちがダンスや歌を見せてくれました。ダンスがすごくうまくてびっくりしました。センターでおどっていた子は私の身長よりすごく低くて、同じ年というのが信じられませんでした。



おどりをみせてもらったあと、ゴミ山で働いている人といた人に取材しました。ジョナサンという昔ゴミ山で働いていたことがあるKnKのスタッフの実家を訪ね、インタビューをしました。虫がたくさんいて、すごく暑かったので、少し歩くだけでもうへとへとになってしまいました。こんな中で、ゴミ山で働く子どもたちは強いと思いました。

私だったら歩くだけでつかれてしまい、働くなんてできません。ゴミ山には行かなかったけれど、遠くから見ていただけでも大きなショックを受けました。自分は歩いただけで疲れているのに同年代で働いている子どもたちがいる現実がすごく悲しかったです。どうにかしなきゃいけない。と強く思ったけれど、自分になにかができるのかは分かりませんでした。そんな自分が情けなかったです。

午後は元ストリートチルドレンの子どもなどいろいろな理由で「若者の家」に入っている子どもたちに会いに「若者の家」に行きました。こわそうだなと思っていたのですが、みんなが一つの家族みたいでとても楽しそうでした。「若者の家」にいるある男の子は、ストリートチルドレンだったので、生きるためぬすみをしてしまったそうです。「生きる」ためにぬすみをするなんて、とうてい日本ではありえないし、ぬすむのは悪いことだけど、一言で「悪い。ぬすんだ人は悪い人だ」と決めつけてはいけないと思いました。

まとめ

今回の旅で一番楽しかった、良かったと思ったことは、たくさんの人と会うことができたことです。やっぱり行ってみないと分からないことがどうしてもあると思います。友情のレポーターになることができて本当に良かったです。「なにかをしたい」

とはずっと思っていたけれど、自分になにができるのかよく分かりませんでした。でも、今回友情のレポーターになって「知ること」「知らせること」をまず頑張ろうと思います。

働いている子どもたちやストリートチルドレンにも助けてくれる人たちがいることや応援してくれる人たちがいること。日本の子どもたちにも、当然と思っていることが当然ではないこと、たくさんのことにありがたみをもってもらえるよう知らせようがんばろうと思います。「知らない」というのが一番こわいことだと私は思います

今回の取材を通して、私はショックを受けました。現実を見てしまったからには、知らないふりはできません。でも何か支えん団体をつくったりはできないし、毎日フィリピンに行くこともできません。だからまずはたくさんの人にこの現実を知ってもらえるよう、自分のやれることにどんどん挑戦して行きたいと思います。いつか世界中の子どもたちみんなであそべるような日がくればいいなあと思います。



第30回 友情のレポーター（2015） 佐藤 旭